

## ■ 何のため？…

私たちはそれぞれの家庭や関わる場所でどんな判断をしていますか？自分が何のためにその存在するのかということを感じなければなりません。私たちにはそれぞれ目的と夢があります。そのテーマに歩むためには自分が「してはならないこと」と「しなければならないこと」がだんだんとわかってきています。私たちは神様の使命を成し遂げるために一日一日を生きています。食べるのはご褒美で食べるのではなく明日私たちが強く生きるため、休むのは今日一日疲れたから休むのではなく明日の力を得るため。それが神様の栄光を現す動機なのです。「何のため」が大きく私たちの人生にかかわってきます。

## ■ 10周年を迎えました…

10周年のテーマは「感謝と自立」です。教会に集って神様と歩む人生というのは、私たちの過去の歩みを変えてくれます。今まで私たちはたくさんの方を受けてきたわけです。今度は私たちが流す番です。私たちが今まで苦しみの道を通ったとすれば、この上もない喜びと思いなさいとダビデやパウロも言っています。なぜ私たちがこのように言えるのかといえば、苦しみの中を通る時には必ず慰めがあるからです。(Ⅱコリ1：4-6) 子ども達が痛い思いをして泣いて親のところに来るのは慰めてほしいからです。慰められるとその痛みも痛かった記憶として残らなくなるのです。だから、人生に問題があった時にこのようにして神様の前に来て痛みを神様に返すとその痛みは癒されてそして慰められるわけですから、慰められた人は今度は痛んだ人を慰めるようになるのです。これがこの地での奇蹟の始まりです。世の中の方法は大きな力で物事を変化させようとしません。けれど、聖書は昔から今まで見れば絶えず一人の人です。一人の人が苦しみの中で神様に慰められて決断するのです。自分の敵が目のごまんといても、3mの巨人ゴリアテが自分の目の前に立っていても、大軍が自分の国を攻め取るうとしていても一人の人が逃げるか、戦うか、それとも信仰によって愛をもって向かうか。その決断をする流れが絶えずあり、それによって今もその決断が継承されてここまで届いたのです。

## ■ 良きサマリヤ人…

ある一人の人が荒地を旅している時に盗賊に襲われて瀕死の状態に倒れていました。そこに当時最高議会の中で立派な人だと言われる議員の一人が通りかかりました。けれど、その人はわざわざその人から離れて見なかったふりをして通り過ぎて行きました。次に通りがかかった偉人も同じように通り過ぎて行きました。ところが、あるサマリヤ人はその人を可哀想に思い、駆け寄って手当をし自分のロバに乗せて宿屋に連れて行きました。更に宿代を払い、足りなかったら帰りにまた支払いますと言って行きました。このサマリヤ人は何故傷つき倒れている人を可哀想に思ったのでしょうか？当時、サマリヤ人は見下され、限られたエリアの中でしか生きられず、とことん苦しみ、傷ついていたので痛みを知っていたからです。だから、同胞を見捨てることができなかったのです。私たちが痛みを通る中で神様から慰められる時、この良きサマリヤ人のように優しくなることができるのです。

## ■ 悪巧みとは… (Ⅰコリ14:20、Ⅰペ4:13-15)

私たちの悪巧みとは、指摘されたことに対して素直に受け取れなくする言い訳する心です。これではキリストの姿に成長することができないのです。

## ■ 1. 痛みのわかる人へ ～大人になっても優しい心～

受けるよりも与えることのできる最大ものは優しさです。優しさは言葉・態度・行動・姿からあらわれるものです。けれど、その優しさは受けた人しかあらわすことができません。ですから十字架に向かわれたキリストからその姿を見なければならぬのです。Ⅱペテ1:2-8の御言葉はその中心に絶えず愛がなければならぬのです。まず愛があらわれて優しさとして出てくるのです。困った人がいたら助けることは優しさだということがよくわかります。けれど、間違った人や問題を見た時に見て見ぬふりをしたり、関わらない…この行動は優しさでしょうか？良きサマリヤ人とは真逆の姿ではないでしょうか。

## ■ 2. 喜びを与え続ける人へ！！！！ (Ⅰペ16:1-10)

キリストが行った業はその場しのぎではなく、その人が神様に造られた本当の姿に戻るために究極の決断をし、究極の方法でその人に向き合いました。私たちがその究極の愛で変えられた一人です。そうしたら、究極の方法で私たちが向き合えるのかといったそれはなかなかできません。だから、その一部で良いのです。受けたものの中から一部種として蒔けばいいのです。一粒の麦がもし地に落ちて死ねば100倍の実を結ぶのです。一日一日出会った人の中に一粒私たちの優しさを蒔くなら多くの実を結ぶということを忘れてはいけません。もし、愛を受けたのに流さない、赦されたのに赦さない、与えられたのに与えない…このように恵みを受けたのに真逆の行為をするならばキリストをもう一度十字架にかけると聖書は語っています。

## ■ 3. 源はどこに！！？満たされることを信じる (Ⅱコリ9:8-14)

「主の教えを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。その人は水路のそばに植わった木のように。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」(詩篇1:2-3) 主の教えとは神を愛し、隣人を自分自身のように愛することです。受けるものよりも与えるものにならなければなりません。神様は蒔く種を絶えず与えて下さり、それはなくなることがありません。また、源が神様だということは神様のものを流すということです。だから、私たちが蒔く、つまり愛と優しさをもって人々とかかわると必ず良い実が残るのです。

## 祈りましょう…

私が神様を愛するのは、まず神様が私を愛して下さったからです。十字架にかかって命をかけてくださったイエス様を愛することができますように。もし、自分を大事にできず、劣等感を感じ、羞恥心にさいなまれ、自分を否定する…そのような思いが出てきたら、イエス様に愛された自分を愛し、その思いを棄てます。そして、あなたに愛されたその愛で隣人を愛することができることを信じます。